青森保健大雑誌　9(1), 49－52, 2008

〔論説〕

出会う　つながる　動き出す
－関係づくりを編みなおしていくために－

田中　弘子[1)]

Ⅰ.「出会う・つながる・動き出す」は、ネットワークづくりの原点

私は、大学で何を勉強してきたのだと聞かれると、大学の恩師から「常に問題意識をもて」ということを学んだと答えてきました。電車に乗って、吊革につかまっていても、ただぼんやりするな。窓から見える人たちの生活状態はどうなっているのか意識して考えなさいという恩師の言葉でした。社会学部の社会福祉を選択した大学で、福祉＝生活という原点と、常に問題意識をもつことを気づかせてもらったのは、私にとって幸運なことでした。

これは、弘前市福祉事務所でケースワーカーの仕事からスタートした私の社会人生活の指針になり、「常に問題意識をもて」ということを意識し続けてきたことが、気がついたら仕事からつながった国内外の広域ネットワークや地域活動ネットワークづくりの土台になっていたと思います。

私の仕事と地域活動は、社会福祉・社会教育・ＮＰＯ・ボランティア・文化活動・子育て支援・まちづくりなどという広域的なかかわりでした。

「出会う・つながる・動き出す」という人とのネットワークから、自然に積み上げられてきた自分の生き方そのものを、広域的なかかわりや地域活動で育てられたと思っています。

Ⅱ. 新しい公共という仕組みづくりに向かっていくコーディネーターの育成を目的に

1. いろいろな人たちとのかかわりを楽しむ

子どもが巻き込まれた事件が報道されるたびに、子育て支援という働きかけが叫ばれています。

子育て支援とは「人と人をつなげていく役割・コーディネート」であり、子育て支援者はその役割を担っているコーディネーターです。人の気持に寄り添いながら、親が子どもに温かいまなざしを向けられるように、親と子の関係をつなげ、一緒に子育てをしていく仲間として親同士の関係をつなげ、自分たちだけでは対応できないことは他の支援者や関係機関につなげる役割です。

そして、さまざまな支援者たちとの出会い・つながりから、自分もかかわりを楽しめるようになり、気づくことによって新しい自分が開かれていく楽しさを知ります。

いまや、支援活動の代表になってきた日本各地のＮＰＯのミッションは、保証された財源があるわけでもないのに、困っている人や社会環境が危機にさらされているなら資金や人材がなくても、動き出すという自発性から、新しい公共という仕組みづくりに向かっています。

2. 保健・医療・福祉・教育のキーマンをつなぐコーディネート力を培う

医療の現場では、医師、看護師不足が課題になっています。男女ともに働き方が問題になっているのです。専門職であっても、結婚、出産とともに女性は退職に追い込まれることも多々あります。２００７年、ＮＰＯ法人日本子どもＮＰＯセンター主催「子ども政策」で北欧３カ国を視察してきました。

北欧３カ国の共通点は、教育・保健・医療・福祉に差別があってはならない。すべて人権につながっている政策であるというところでした。

子どもを真ん中においた政策は、親の働き方につながり、育児保障につながるという、みごとな巡りをしています。

確かに給与の半額にちかいほど税金は高いし、物価は高いのですが、教育費や医療費が無料というのは安心し

1）ＮＰＯ法人日本ソーシャルワーカー協会
Japanese Association of Social Workers
青森県ソーシャルワーカー協会
Aomori Association of Social Workers
ＮＰＯ法人あおもりＮＰＯサポートセンター
Aomori NPO Support Center

て生活していける社会であり、子どもを安心して産み育てられる社会であると思いました。今の日本は、教育費、出産費などの育児保障問題から、安心して子どもを産み育てられない社会構図であり、社会福祉はこれでいいのかと叫ばざるをえない悪い巡りをしています。

これに、産婦人科医師や看護師不足などさらに拍車をかける状況に追い込まれてきています。

税金の使い方が、子どもを真ん中においた差別のない使い方に変わってほしいと痛切に願います。

保健・医療・福祉・教育の主軸になっているキーマンのつながりをつけるコーディネーターがいれば、課題を共有し、解決に向かう共通意識を図るきっかけが生まれ、共に新しい公共に向かっていける関係づくりを編みなおせるのではないでしょうか。大学で学ぶ学生には、関係づくりの編みなおしを学ぶコーディネート力を培ってもらい、それぞれ主軸になっているキーマンを発掘して、新しい公共という仕組みづくりへ向ってほしいと思います。

Ⅲ．仕事や地域活動を通して出会い・つながり・動き出したネットワーク

1．福祉事務所のケースワーカー時代

1）官と民の学習の場を求めて、青森県ソーシャルワーカー協会へ入会

（1）官と民のともに学ぶことが協働につながることを学ぶ

大学では、社会福祉のゼミ仲間、社会学部自治会メンバー、児童文化研究会サークル部員、そのサークルを束ねていた文化団体連合会のメンバーとつながっていた私は、就職してから公務としての仕事仲間だけの自分に物足りなさを感じていました。

そこで出会ったのが、青森県職員が中心になって学習していた青森県ソーシャルワーカー協会だったのです。仕事への疑問や課題、公務の中での解決策など、官と民の立場にあるいろいろな職種の先輩たちから学ばせてもらいました。

だんだん青森・八戸・弘前の県内３カ所が中心になり、それぞれの地域活動が変化していきました。青森は、市民会議としてさまざまな活動をし始め、八戸は学習が中心になり、弘前では、進行性筋ジストロフィーを中心とした難病患者の啓蒙活動として、仙台にある社会福祉法人「ありのまま舎」制作の映画「車椅子の青春」「さよならの日々」の上映活動につながっていきました。八戸在住の青森県ソーシャルワーカー協会会長が、病気で亡くなられた時、久しぶりに青森・八戸・弘前の主軸メンバーが集まり、私が会長を引き受けることになったのです。

（2）日本ソーシャルワーカー協会は、会長との出会いと人権学習

八戸短期大学教授であった青森県ソーシャルワーカー協会福士忠夫前会長の踏ん張りと、1959年に誕生した日本ソーシャルワーカー協会の筑前甚七元会長の踏ん張り、そして青森県と日本ソーシャルワーカー協会再建にそそいだお二人のパッションが、青森県ソーシャルワーカー協会の会長を引き受ける私のきっかけでした。

日本ソーシャルワーカー協会は仲村優一会長に、2007年鈴木五郎会長に引き継がれ、仙台から東京に事務所を移し、2005年ＮＰＯ法人取得しています。

仲村前会長の挨拶に常に出てくる言葉です。「職場での上下関係なしに腹をわって話しあえる協会は貴重である」このミッションに共感した私にとって、日本・青森県ソーシャルワーカー協会は、まさしく人権学習の場となりました。

2．保健センターの保健予防、国民健康保険の仕事をしていた時代

1）医療職・看護職・食生活改善推進員会との出会いとつながり

保健センターが建設され、弘前市の保健予防課（現在は健康推進課）と医師会が同じセンターに入り、私も医療職・看護職のメンバーと一緒に働く行政職の一員となりました。

ケースワーカーとして、議論を戦わせながら共に苦楽をともにできた仲間意識を経験している私には、最初はなかなかなじめない世界でした。職種の違いは、誤解を招くこともありコミュニケーションが難しい職場でしたが、医師会の方たちとのスキー旅行やボーリング大会、ビアガーデンなどの「飲みにケーション」が、「第１回健康まつり」を共にスタートできるきっかけになりました。今では、いろいろ問題になるためこの「飲みにケーション」はできなくなったようですが、ここで私のコーディネート力を培ってもらったと思っています。

また、地域活動である食生活改善推進員会の養成の仕事は、私に企画力をつけさせてくださいました。食生活改善推進員会との出会いは、その後の教育委員会の仕事に、また、ＮＰＯの活動をしていく私にとって、貴重な出会いとつながりになりました。

2）女性の視点を行政の中に吹き込んでいくことと女性職員育成のグループづくり

男女共同参画基本法が成立する1999年にかけて、男女共同参画の波が立ち始めた頃、市行政の仕事に

とって、何が大事なのかと考えていた時、市民の視点を忘れないことという共通意識をもった女性職員15名で市職員自主研究グループ「うきうきクラブ」を設立しました。

「こんな市役所がほしい」「こんな施設がほしい」というワークショップを開催、公共施設を検証するために施設視察研修、「ひと育ちセンター」が必要などと、年1回発行したうきうきクラブ瓦版で提言してきました。

女性職員の意識向上は、市職員の意識向上につながったと私は思っています。

それは、女性職員がアメリカやドイツへの海外視察に行けるようになったことにもつながりました。

3）卒塾生が、まちづくりにかかわる仕掛人になり、ＮＰＯ法人化に向かう

弘前市では竹下内閣時代1988年の1億円ふるさと創生事業を基金としてを人づくりにだけ使うことを決め、「ひろさき創生塾」「きらめき女性塾」「青年プロジェクト塾」で、市民参画の種まきをしました。

ＮＰＯ法人コミュニティネットワークＣＡＳＴ（弘前市1号のＮＰＯ法人）、Ａ toZ・奈良美智作品展覧会から設立されたＮＰＯ法人harappa、ＮＰＯ法人青森県男女共同参画研究所設立、環境子どもミュージカルグループ「リエゾン」を設立、青年プロジェクト塾卒塾生の総合型地域スポーツクラブを弘前の地域に設立したいとうミッション・パッションに共感したメンバーが2004年ＮＰＯ法人スポネット弘前を設立、津軽の新しいライフスタイルを提供する「弘前見探図」など、卒塾生の活躍はめざましく、今や、まちづくりにかかわる仕掛人になっています。

そして、これが弘前の中心商店街に事務所を置く、4つのＮＰＯ法人につながっています。[1]

まさしく出会う・つながる・動き出した事例になります。

3．教育委員会で生涯学習、社会教育、公民館の仕事をしていた時代

1）生涯学習情報提供ネットワークシステムの開設（各施設・学校ネットワーク）

教育委員会の体育・文化施設のほか、商工労政、観光、社会福祉関連施設をネットワークして可能になるこのプログラムシステムは、縦社会の行政を横社会につなげる総合調整力、すなわちコーディネート力がなければ開設できなかったシステムでした。

2）コーディネーター研修開催で出会った「大久保一座」とのつながり

生涯学習情報提供ネットワークシステムの開設はしましたが、対応するのはやはり人であり、その施設関係の人にはコーディネーター研修が必要であると考え、私の地域活動ネットワークから「大久保一座」と出会い・つながったのです。

この大久保一座とのつながりは、私が2007年退職後に取り組んだ、文化ボランティアと行政がともに学ぶことから動きはじめた文化庁委嘱事業「文化ボランティア全国フォーラムin弘前」開催でも動き出しました。

4．文化会館・市民会館・駅前市民ホールという文化行政の仕事をしていた時代

1）官と民のギャラリーの点と点を線にした、コーディネートでしかけづくり

キーマンを発掘して、「ギャラリーネットワークひろさき」を設立することができました。

そのマップは、前述した「弘前見探図」がボランティアで作成し、現在は50ギャラリーがつながっています。

2）音楽団体の点と点を線にそして面にした、コーディネートでしかけづくり

同じくキーマンを主軸に「音楽ネットワーク弘前」を設立し、リーフレットは言うまでもなく「弘前見探図」が作成、音楽ネットワーク弘前へ委託して「弘前音楽祭」を2008年開催することもできました。

3）市民会館・駅前市民ホールに文化ボランティア導入

大久保一座から学んだことで、前文化庁長官河合隼雄氏提唱の文化ボランティアを2005年に導入したところ、たくさんの文化ボランティアが登録し、楽しみながら活躍しています。

4）ＮＰＯや地域活動のキーマンでつくる「キーマンネットワークひろさき」の設立

各ＮＰＯ法人や地域活動団体のネットワークで、各団体のそれぞれのキーマンが動きました

であい・つながり・動き出した主軸メンバー「キーマンネットワークひろさき」をコーデネート。2007年「文化ボランティア全国フォーラムin弘前」開催で動き出しました。

地域に根ざし、地域のあらゆる世代を巻き込み、子どもにつないで守り続けている、“ねぷた”を体感してもらいながら「次世代を育てる地域」を感じてもらいたいという想いから弘前で開催いたしました。そして、参加してくださったみなさには、まさしく文化ボ

アンティアの原点といえる“ねぷた”に感動していただけたと思っています。2008年は中心商店街にある4つのＮＰＯとともに「子どもを真ん中においた日」を年3回開設予定です。

５．ボランティア活動の課題からＮＰＯのミッションを学ぶ

ＮＰＯ活動では、行政ではなかなかできない縦や横のつながりができます。有償、無償どちらも自分たち（組織）が決め、報酬が目的ではない新しい形の公益性の確立ができ、地域に、ＮＰＯを広め、ＮＰＯ活動をサポートしながら成熟した市民社会をめざしています。そして、行政、企業など多様な組織と人をつなぎ、課題を解決していく夢がもてます。ＮＰＯのミッションは、保障された財源があるわけではないのに、困っている人や社会環境が危機にさらされているなら資金や人材がなくても動き出すという自発性であり、新しい公共という仕組みづくりに向かっています。

Ⅳ．産学官民連携推進のためにも、コーディネート力を培う

官と民がともに学ぶことから、キーマンと出会い・つながり・動き出したと思っています。

コーディネート力を培うことによって、産学官民連携が進みます。

Ⅴ．保健・医療・福祉・教育を担う人材育成は、成熟した市民社会・住民から公をつくるという新しい公共という仕組みづくりに向かっていくコーディネーターを育てることではないかと私は考えています。

脚注

(1) NPO法人コミュニティネットワークCAST
NPO法人　harappa
NPO法人　スポネット弘前
NPO法人　弘前こどもコミュニティ・ぴーぷる